聴覚障害についての情報紙　No.４　平成 18 年１１月７日

でんでんくん

でんでんくん　by eriko

でんでんくんは，年6回（奇数月1日）発行予定です。

秋田県立聾学校　聴覚障害教育支援部　　TEL ８４５－０２９１　FAX ８４５－６９０２

「秋」と言ったら何を連想しますか。さつまいも、くり、紅葉、落ち葉、ススキ、秋刀魚…。「秋」ということばの引き出しを開けると、きっとこのようなことばがあることでしょう。秋刀魚を焼く香りを思い出したり、いもほりをした時の土の感触や、落ち葉を踏んだ時の音などを思い浮かべたりしませんか？ことばの引き出しには、たくさんの経験から得たイメージが言語化されてつまっています。これらのことばをもとに、私たちは経験を想起したり、コミュニケーションしたり、思考したりしているのです。

さて、子ども達の引き出しには、どれ位のことばが入っているでしょうか。秋ならではの経験にことばをのせて、豊かなイメージをもったことばを、たくさんたくわえて欲しいと思います。「読書の秋」「食欲の秋」「スポーツの秋」…。今年の秋は、どんな秋でしょうか。

これまでを振り返って
～インテグレートした経験から～

現在本校に勤めている教員から、ご自身のインテグレートした経験を綴っていただきました。友達のこと、勉強のこと、将来のこと…悩みつつも夢に向かって努力し実現させた姿は、同じく聴覚障害のある児童生徒、保護者のみなさん、そして先生方への励ましになるのではないでしょうか。

【幼稚部から小学校へは比較的スムーズ？】

私は父の仕事の都合で幼稚部は県外の聾学校幼稚部に通っていましたが修了後、秋田に戻ってきて地域の小学校に入学し、中学校、高校、大学と進んできました。幼稚部年中のころから幼稚園との交流もしており、もともと活発な性格だったので小学校に入った後はわりとスムーズにみんなの中に入っていけたように思います。集団下校のときにみんなが家と違う方向に進むのを見て「私の家、こっちだよ！」と言ったら近くにいた子たちが「私も」「私も」と言い出してそれからはその３人でいつも一緒に帰り、よく遊んでいました。

【小学校中学年あたりから見えてくる難しさ】

けれど、やはりだんだん会話で通じていないところや行き違いも生じていたのだろうと思います。３年生くらいになると休み時間も一人で本を読んでいることが増えました。それでも、昼休みはみんなと一緒に体育館で色おにやゴムとびをして遊んだものでした。体を動かす遊びは問題なくても、おしゃべりがどうしても難しくなるのですね。この頃から学校の図書室、また週末は父に明徳館へ連れて行ってもらい、本をたくさん借りて読むようになりました。暇さえあれば読むという感じで江戸川乱歩や怪盗ルパン、大草原の小さな家などのシリーズ物を次々と読破していました。

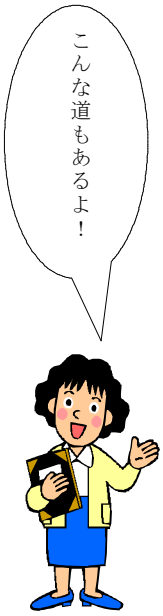
友達はクラスは別だけれども毎朝いっしょに登校する子がいました。おしゃべりだけでなく、しりとりをしたり、石蹴りをしたり、交換日記をやったり、今振り返って小学生なりにコミュニケーションの方法を模索していたんだなぁと思います。

【友達、部活、勉強・・・忙しかった中学・高校時代】

中学校に入る少し前にまた父の転勤で大曲に引越したのですが、気さくな土地柄と言うのか、クラスでも部活でも仲のいい友達ができて、学校が楽しくなりました。自転車通学、部活、勉強と忙しくなって読書の時間はほとんどなくなっていきましたが充実していたように思います。中１の終わりに父の転勤で再び秋田市に戻ることになったとき、「泣けてくる」と言いながら手紙を渡してくれた友達のことが、今でも嬉しく心に残っています。

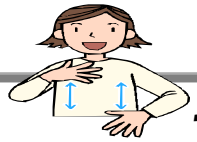
高校のときは授業の後にテストについての先生の説明などをメモに書いて渡してくれる人や、講演会が終わった後に「分かった？」と聞いてきて可能な範囲で内容を教えてくれる人もいました。今の聾学校でやっているような情報保障は雲の上の話でしたが、人の温かさに支えられ、聴力変動とめまいに振り回されながらも頑張り続けることができました。

それでも高２のとき、当時の欠格条項から薬剤師になるという目標が絶たれたときは自分の将来像が描けず、「もう勉強なんかしなくてもいい」と投げやりになっていました。そんなとき、高１のとき担任だった先生が「聾学校の教員を目指してＴ大学に入ってはどうか」と大学の資料を見せながら１つの道を示してくれました。それからは幼稚部のときの担任に聾学校の教員免許を取得できる大学はどこかと手紙を出して聞いたりＴ大学に関する情報を集めたりして、大学合格だけを念頭において必死で勉強しました。目標があると人は頑張れるものだなと思います。



【多くのことに気づかされ、考えさせられた大学時代】

そして大学入学。Ｔ大学入学とその後の学生生活はそれまで勉強だけは頑張ってきたけど実際は宙ぶらりんだった私にとって、自分の考え方、ものの見方の基盤を作っていく上で貴重な時期でした。まず手話を覚え、講義では手話サークルの有志によるノートテイクや手話通訳で情報保障をしてもらえるようになりました。みんなが笑ったときにワンテンポ遅れるとはいえ、どうして笑ったのかが分かって自分も偽りではない笑みを浮かべることができるのです。それまで窮屈に感じていた授業の時間が一気に新鮮なものになりました。今、目の前で話されていることを理解するという作業もそれまでにない経験で私の脳みその一部は永い眠りから叩き起こされ、あたふたしながらも懸命についていこうとしている状況だったと思います。５～６人の集団での会話も手話を使っているのでみんなが何を話しているかがわかります。



にもかかわらず、入学して間もない頃は、話は分かるのにその中に入っていけない、何を言えばいいのか分からない自分がいました。「遠慮しないで」「どう思う？」と声をかけられても「う～ん」と笑ってごまかすしかできなかったのです。それまでずっとお客様状態で過ごしてきた私に、目の前で話されていることを理解し、それに対して自分の意見や感想を持つというのは必要ないことでした。

でも、大学入学後は聴覚障害学生であっても平等に指名され、また、サークル等で話し合いをもつ機会も多くありました。それゆえに人と衝突したり、「今の自分は本当の自分じゃない」と、悩みぬいた時期もありました。

「いつもにこにこしていたのに」「変わったね～」と高校までの友人には何度か驚かれました。また、それまで過ごしてきた環境に対する不満をぶつける中で「高校までのあなたが本当のあなたじゃなかったことくらい分かってる」と母に言われたこともありました。分かっていてもなす術がなかった親の心情もつらいものがあったのではと思います。過去のことをとやかく言っても仕方ない、これからどう生きるかが大事だと今は思っていますがそれでもはやり、小～高の時期は残念だったと思うときがあります。

【今、聾学校教員として】

今は聾学校教員として秋田に戻ってきましたが、手話の導入、サテライト教室の実施、手話通訳やパソコン通訳での情報保障など、秋田が少しずつ変わっていくのを嬉しく、また時にはうらやましく思いながら見ています。まだまだ変われる、頑張れると思うと楽しみな気もします。特別支援教育への移行など聴覚障害教育を取り巻く状況はめまぐるしく変わり続けていますが、手話も含め、多様なコミュニケーション手段を駆使した分かり合える環境の中で、人との関わりを学び、多くの情報を得て、自分の考えを持ち、話したり（手話でも口話でも）書いたりして伝えることのできる人を育てることが私たちの使命として変わらずにあるのではないかと思っています。

知っていますか？

サイレントK　中日　石井裕也投手

２００４年のドラフトで、中日が６巡目に指名した石井投手は、先天性の感音性難聴です。左耳はほとんど聞こえず、右耳に補聴器をつけています。集中するため、マウンドでは補聴器のスイッチを切っているそうです。

幼稚園の頃から野球に親しみ、小学生の頃は外野手としてバッティングが大好きだったそうです。転機が訪れたのは、小学校５年の時。
「たまたま６年生のピッチャーがケガをして、投手に抜擢されたんです。球は速かったけど、最初はノーコンで苦労したようです。もともと打つほうが好きで、練習嫌い。特に走り込んだり、投げこんだりといった練習は大の苦手でしたが、この頃からは、夜グローブを持って外に出て行くようになりました。こっそり努力したんでしょう」と、お父さんは語っています。

その成果か、中学も地元の公立校の野球部で投手を務め、横浜の大会でベスト４に進出。甲子園に出たいと横浜商工（現横浜創学館）に進学し、２年生からエースとして活躍しました。
高校卒業後、クラブチームで野球を続け、中日から指名を受けました。

プロになるにあたり、周囲の人の話や質問が速いと内容が分からない、といった不安もあったそうです。しかし、「清原さんに真っ直ぐで勝負したい。自信？あります」、と語ったほどの、内に秘めた闘志で、現在も活躍中です。石井選手は、同じく聴覚にハンディのある野球少年の憧れであり、希望を与えてくれる大きな存在です。

がんばれ石井投手！！